

入門期

「繰り返し丁寧に」を心がけて

元新宿区立西戸山小学校教諭

安田恭子

教科書と出会う瞬間を大切に

入学してくる子どもたちは、みんなが同じスタートラインにいるわけではありませんが、どの子も小学校生活に大きな期待をもっており、とりわけ「勉強」を心待ちにしています。そんな子どもたちを前に、最初に教科書を開くとき、私はまず表紙を見せて、「どきどきするね。何が載っているのかな」「さあ、開くよ」と言葉にするようにしていました。

子どもたちの中には、もらった教科書をもう開いたという子もいるでしょうが、「みんなで勉強する」楽しさは特別なものです。新しい教科書を手にも、先生もわくわくしているという気持ち伝わるように、投げかける言葉を工夫してみてください。

基礎的な学習習慣の定着を

「さあ はじめよう」には、学校生活の言葉を知る、お話に出会う、正しい姿勢で鉛筆を持つなど、身につけてほしい基礎的な学習習慣が分かりやすく紹介されています。

これらの学習習慣を日常生活の場にも広げ、定着を図るためには、掛図などを活用して子どもたちの目に触れる場所にいつも示しておくことも有効ですが、ここでも先生の言葉かけが大きな意味をもちます。授業の終わりに「家でもやってみようね」と投げかけたり、運動場や公園で、「声の大きさは、どうするのか」と確かめたりします。「あいうえお」のなぞり書きをするときも、ただ書かせるのではなく、「ここはきちんと止めて、おしまいのところはすうっと書くのよ」と言葉を添えることが大切です。時には、「昨日勉強したこと、遊びの時間やってみたよ」と、子どものほうから言ってくることもあります。そんなときは、その子の言ったことをみんなに紹介して、大いに褒めてあげるようにしましょう。

自由に思いを伝え合うことから

入門期第一教材は「あき」です。絵を見た子どもたちは、たくさんの発見をします。最初は「木がある」「この子は走っているよ」と、絵にあることを見たま言葉にしているのが、だんだんに「この子は、『あつ、鳥だ』と言っているよ」「手をつないで、うれしそうにしている」というふうになり、自分の想像を言葉にするようになります。文字に注目する子がいたら、それも認めてあげていいですが、先生のほうから無理に文字に注目させようと急ぐ必要はありません。発見や思いを伝え合い、聞き合う中で、クラス全体にお互いのよさを認め合う気持ちも生まれます。

また、授業の終わりには、「今日は、こんなことができるようになったね」「しっかり声が出せましたね」と言葉にして、子どもたちに成長を実感させたいものです。

教材はさまざまな場で活用する

私は、低学年を担当する若い先生たちに、「繰り返し丁寧に」ということをよく言います。教科書の教材は、「一回学習したら終わり」ではなく、別の学習の場でも有効に活用することができます。

一年上巻には、「かきと かぎ」「ねこと ねっこ」「おばさんと おばあさん」「おもちゃと おもちゃ」の唱え歌が配られています。それぞれ濁音・促音・長音・拗音を学ぶ短い詩ですが、そこで扱って終わるのではなく、別の教材を学習しているとき、「ちよつと読み方を確かめてみましょう」とページをめくり直し、みんなで声に出して読んでみることもできます。一時間の授業の中にそんな学習を取り入れても、多くの時間はかかりません。反復することで定着が図れると同時に、子どもたちも繰り返しを楽しむようになります。

入門期は、それからの国語学習の基礎を培う大事な時期です。学年が上がれば、当然学習のレベルも上がり、基礎の部分に立ち返ることも難しくなります。そのためにも「繰り返し丁寧に」教科書を活用し、楽しく学習することで、確かな力を身につけたいものです。



▲「あき」(1年上P1)



▲「かきと かぎ」(1年上P28)



▲「ねこと ねっこ」(1年上P42)



やすだ・きょうこ

福島県生まれ。日本国語教師の会 櫻の会会員。共著に「小学校国語科学習指導の研究」シリーズ(東洋館出版社)。「どの子も書ける! 全教科で役立つ「記述力」UPの授業21」(明治図書)などがある。

話す・聞く
書く

みんなが参加する主体的な学習の場

明星大学 特任准教授

邑上裕子

話すこと・聞くこと
クラスづくりにつながる場を

二年以上の学年初めに新設された「言葉の準備運動」の系列は、子どもをリラックスさせると同時に、コミュニケーションの素地をつくることができます。「じゅんばんに ならぼう」(二年以上)は、話をよく聞いて、みんなが声を出さないと成り立たないゲームですし、「ばらばら言葉を聞き取るう」(四年以上)は、注意深く聞き取らないと答えを当てることができません。こんな体験を積むことで、思ったことを安心して言い合える関係が生まれ、それからの学習活動に全員が参加しようという気持ちになるはずです。

友達にインタビューして他已紹介する「教えて、あなたのこと」(五年)や「つないで、つないで、一つのお話」(六年)など、発達の段階に応じた工夫もされています。

す。短時間でできて、道具もいらぬ活動ですから、学期の初めだけでなく、朝の間などに、随時取り入れてください。

主体的に聞く力を高める

新しい教科書は、「話す」「聞く」「話し合う」という三つの系列になっていますが、特に目を向けてほしいのが、「聞く」の系列です。聞くことの指導は、過去において、態度面が重視されてきたくらいがりましたが、これから求められるのは、主体的に聞く力です。「ともさんは どこかな」(二年以上)や「聞き取りメモの工夫」(四年以上)では、聞くためのスキルを身につけることができます。また、「よい聞き手になろう」(三年以上)では、自分の考えをつくるため、相手から聞き出し、聞き分けるという学習活動が位置づけられています。

どれも、子どもたち一人一人が目的を

見通しをもって学習を進める

高学年には、「明日をつくるわたしたち」(五年)、「未来がよりよくなるために」(六年)という教材が位置づけられています。資料(話題)をきっかけに、みんなで情報交換し、自分の考えを文章にまとめるという学習です。話すこと・聞くこと、書くことが複合された活動だけに、子どもたちに学習の道筋や見通しを理解させることが重要になります。そのためには、教材の最初のページにある「活動の流れ」が、有効なヒントになるはずです。

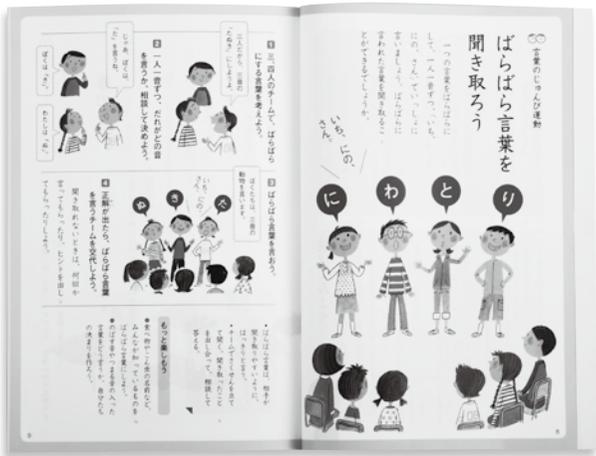
教科書を上手に活用する

教科書の中には、どの学習においても活用できる汎用性ある情報があります。これは書くことに限らず、すべての学習に共通することです。私が、特におすすみたいのは、各巻冒頭にある「いつも気をつけよう・続けてみよう」と巻末付録「たいせつ」のまとめです。主体的に学習を進めるための助けとして、いつでも使えるものから、ぜひ注目してください。(談)

書くこと

多様な文種と出会う

新しい教科書では、観察・記録・説明・報告・紹介など、多様な文種を書く活動が、例文と合わせて紹介されているので、文種による書き方の違いやおもしろさが、子どもたちにも伝わるはずです。新しく登場した「たから島のぼうけん」(三年下)は、教科書にある地図を見て物語を作る学習ですが、地図を見ながら、「何を持って行くか」など、話し合いの活動に広げられることもできます。各教材にある例文は、どれも発達の段階に見合ったものですが、例えば「わたしの研究レポート」(四年下)では、ここにある例文を参考にして、先生方がクラスの実態に合った文章を作り、言い回しや表現の指導につなげることも可能です。



▲「ばらばら言葉を聞き取るう」(4年上P8-9)



▲「たから島のぼうけん」(3年下P64-65)



むらかみ・ゆうこ

東京都生まれ。日本国語教育学会常任理事。共著に、『はじめて出会う古典作品集』(光村教育図書)、『未来に生きる話し手・聞き手を育てる「話し言葉」の学習』(光村図書出版)などがある。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

読む 自分に引き寄せる楽しさを

筑波大学附属小学校 教諭 桂 聖

文学的文章

「自分だったら」と考えてみる

一年上巻に、「ゆうやけ」という作品が登場しました。新しいズボンがうれしくてどきどきしていたのに、遊んでいるうちに夢中になって忘れてしまう主人公の姿は、低学年の子どもたちの経験と重なるものです。「自分と似ているところはないかな」と投げかけると、次々に発言が生まれるはずです。

また、「ミリーのすてきなぼうし」（二年上）も、同じように「自分だったら、どんな帽子が欲しいだろう」と想像しながら、楽しく読むことができます。「こんなときは？」「こんな場所だったら？」と、先生が投げかけることで、いっそう豊かな想像が膨らむでしょう。

成長の過程に寄り添って

新しく中学年に入った「もうすぐ雨に」（三年上）、「プラタナスの木」（四年下）は、どちらも人物の気持ちの変化を読み取るのにふさわしい作品です。「もうすぐ雨に」が「かえる」に対する気持ちの変化であるのに対して、「プラタナスの木」は、「木」という、風景に近いものに対して抱く人物の気持ちの変化を読み取ることになり、二年間を通して、子どもたちの読みがどう変化するか、学習の積み上げを確かめてみたいものです。

友達との関係が描かれた「なまえつけてよ」（五年）は、クラス替えが多くある五年生の始まりに適した内容です。子どもたちの成長の過程を見ると、「近寄りたいのに、いたずらする」といったように、それまで一体化していた「行動と心情」が逆になるのも、この時期の特徴です。登場人物

「勇太」の行動を、「自分自身と比べてみよう」と投げかけてみてはどうでしょう。

六年の卒業期に配された「かなえられた願い——日本人になること」は、社会や世界に向けて意識が高まるこの時期に、ぜひ出会わせたい文章です。「話す・聞く」教材「今、私は、ぼくは」と関連づけて扱うことも考えられます。

説明的文章

少しずつ高みを目ざす

一年上巻に新しく入った「うみの かくれんぼ」は、文章全体に関わる「初め」の部分があり、そのうえで、複数の事例それぞれに対して「何が、どのように」と説明されています。それまでに学習した「くちばし」と読み比べて、その違いに気づかせることもできます。

学習のつながりという点では、三年一学期教材「こまを楽しむ」にも注目したいと思います。内容だけでなく、論理のおもしろさに気づかせたい中学年では、年間を通して、だんだんにレベルを高めていく配列がなされています。指導計画を立てる際、この後に続く「すがたをかえる大豆」「ありの行列」（三年下）を並べて読んでみる

ことをおすすめします。

また、読書に位置づけられている「里山は、未来の風景」（三年上）は、子どもたちにとって興味深い内容です。これまで教科書になかった文種に出会うことで、読書の幅が広がるでしょう。

自らの生活に目を向けて

高学年には、論理の進め方のおもしろさと、子どもに考えさせたい内容とを兼ね備えた文章が登場しました。「想像力のスイッチを入れよう」（五年）は、筆者の意図を捉えながら、「自分なら、この文章にどんな題名を付けるか」という話し合い活動に広げても、活発なやり取りが期待できます。

「時計の時間と心の時間」（六年）は、書かれている内容を自分の生活と結び付けながら考えさせたい文章です。六年生のこの時期の子どもたちは、データを集めて、それを根拠にスピーチするなどの活動も進んで行います。そうした活動と関連づけることも有効でしょう。そんな学習を通して、実験結果やデータを活用した筆者の論の展開の工夫に気づかせたいと思います。（談）



▲「なまえつけてよ」（5年P20-21）



▲「こまを楽しむ」（3年上P42-43）



かつら・さとし

山口県生まれ。著書に『国語授業のユニバーサルデザイン』（東洋館出版社）、「フリートークで読みを深める文学の授業」（学事出版）などがある。光村図書小学校『国語』教科書編集委員。